

太陽 ASG

エグゼクティブ・ニュース

テーマ：伝える極意

執筆者：株式会社サイマル・インターナショナル 会議通訳者 長井 鞠子氏

要旨（以下の要旨は1分30秒でお読みいただけます。）

昨年（2013年）9月のブエノスアイレス IOC 総会で2020年の夏季オリンピックに東京が選出されました。最終プレゼンテーションで滝川クリステルによる「お・も・て・な・し」発言が、昨年の新語・流行語大賞を受賞したのも記憶に新しいところです。

この総会で通訳として活躍されたのが、サイマル・インターナショナル会議通訳者の長井鞠子氏です。長井氏は、今年3月のNHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」でもご紹介されたので、ご存知の方も多いと思われます。今回は長井氏に、国際会議等での通訳経験から得られた「意思」を伝える「極意」について解説して頂きます。

筆者の通訳としての仕事は、国際基督教大学の学生の時に開催された前回（1964年）の東京オリンピックで、女子競泳の紹介を英語で行ったのが最初です。アルバイト料も高く「通訳の仕事はオイシイ」と思い、その後サイマル創設者の國弘正雄達に声をかけられ通訳の道に進みました。通訳と言うと、単に言葉を伝えたり返したりするだけ、と思われがちですが、そうではありません。通訳の仕事は話し手の発言を聞き手の「心」に届けることであり、そのため話し手側には「伝えたいこと（中身）」、「上手な伝え方（ハウツー）」、「伝える熱意（パッション）」の3つ要素が必要と考えます。

今回の東京オリンピック招致を例にとると、「伝えたいこと（中身）」は、「東京にオリンピックを持って来たい」という気持ちです。このため、開催準備基金が4,000億円にもなることや、皇室初のプレゼンターとして高円宮妃殿下にもご登場頂きました。

「上手な伝え方（ハウツー）」も大事です。招致チームでは、外国人プレゼンテーションのコンサルタントを複数雇いました。彼らからは笑顔に見せるために「口角を上げて」との指導も受けましたが、猪瀬前都知事は折角口角を上げて笑顔が見えなかったりしました。また、プレゼンでは広い会場の全員に向かって話しかけているように見せるため、似た会場を借りてカメラ視線を意識しての練習も行っています。

メディア対策も大切で、メディアとの受け答えでは「悪い、弱い」などのネガティブな言葉の使用を禁止されました。筆者は「それは通訳の任務ではない」と反駁しましたが、「あなたは通訳でなく招致チームのメンバーだ」と諭され、「被災地」を「disaster area」（災害地域）とせず「affected area」（影響を受けた地域）と訳したりしました。

3つ目の「伝える熱意（パッション）」で特筆すべきは、安倍総理の「The situation is under control (<放射能汚染水の>状況は、制御されています)」でしょう。これは英語で総理自ら話したことですが、東京オリンピック招致に向けた強い「パッション」が込められている様に思われます。

国際化の中では言語の違いを乗り越えて行かねばならず、伝えるべき「中身、ハウツー、パッション」を持って自分の「意思」を伝えて頂きたい、と筆者は結んでいます。

「太陽 ASG エグゼクティブ・ニュース」バックナンバーはこちらから⇒<http://www.gtjapan.com/library/newsletter/>
本ニュースレターに関するご意見・ご要望をお待ちしております。Tel: 03-5770-8916 e-mail: t-asgMC@gtjapan.com
太陽 ASG グループ マーケティングコミュニケーションズ 担当 藤澤清江

テーマ：伝える極意

株式会社サイマル・インターナショナル 会議通訳者 長井鞠子

— 以下の内容は、「伝える極意」（集英社新書）を参考に、筆者の考えを加えて執筆しています。

1. はじめに

私は2020年の東京オリンピック招致に日本側の通訳として参加して以来、随分マスコミにも声を掛けて頂く機会が増えて参りました。

3月（2014年）初めにはNHKドキュメンタリー番組「プロフェッショナル 仕事の流儀」に通訳の仕事として取り上げられ、また最近では集英社から「伝える極意」を出版することが出来ました。

こう書きますと、私が帰国子女のように思われるかも知れませんが、そうではありません。高校（仙台、宮城学院）時代にAFS（American Field Service）の交換留学生として約1年間アメリカのテキサス州ダラスに留学した経験がある位で、大学（国際基督教大学<ICU>）で英語を学んで、その後に通訳の道を進むようになりました。

2. 通訳への道

東京オリンピックと言えば、実は1964年のオリンピックの時にアルバイトとして参加しています。この時は女子の競泳が担当で「第一のコース、〇〇さん、オーストラリア。じか〜ん、〇分〇〇秒」と言った紹介を英語で致しました。東京オリンピックの記録映画の英語版に私のアナウンスが残されていて大変懐かしく感じます。

このような単純な業務だったので、「通訳」というにはおこがましい気がします。もちろん、当時は自分がプロの通訳者になるとは夢にも思いませんでしたが、オリンピック競技を間近で観戦出来たのが良い思い出になりました。ただ、アルバイト料が非常に高く、仕事も簡単、組織委員会のブレザーを貰い格好良い、従ってこんなに良い仕事はない、と思ったのがこの仕事との出会いでした。大学卒業後、ICUに助手として残ることを決めた直後に、國弘正雄、村松増美、小松達也といった、サイマル・インターナショナルのメンバー達に声を掛けられたのです。助手のお給料では生活出来ないで、生活費は通訳で稼ごうとなった訳です。当時は大学初任給が2万4千円位でしたが、私は月に4万円を下回る事のない報酬を頂いていました。「通訳の仕事はオイシイ」と考えたことは外れではなかったこととなります。

プロの通訳になって気がついたのは、当然ながら、そんなに甘いものではありませんでした。小松達也にはこの世界に入って数年が経ち仕事にも馴れてきた頃、コーヒータイムに「最近、周りにチャホヤされて、いい気になっていないか」とやんわりと言われたことがあります。天狗になっていたつもりはなかったのですが、確かに仕事にも馴れて「自分は通訳が出来る」と思ってしまっていました。通訳の世界に正解はありません。「自分は出来る」と満足してしまえば、通訳者としての技量はそれ以上伸びることはないでしょう。小松はそのことを言いたかったのだと思います。先輩のオジサマ方は頼りになる、そして厳しい耳を持った存在でした。



3. 伝える技術—話し手に求められる3要素

通訳と言うと、単にA氏が言ったことをB氏に伝え、それに対するB氏の答をA氏に返すだけ、と思われるのなら、飽きっぽい私が半世紀近くもこの仕事を続けてこられたか、疑問です。

ロシア語とフランス語を操り、「伝説の名通訳者」と言われるフランス人アンドレ・カミンカーは、世界の外交史上初めて会議通訳が行われたとされる1919年のパリ講和会議で1時間にも及ぶ演説を通訳しました。その際、話し手から「あなたの通訳は私の発言通りではなかった」とクレームを付けられたのに対し、カミンカーは少しも動じることなく、「はい、違っています。私は“あなたが言ったこと”ではなく、“あなたが言うべきだったこと”を伝えました」と答えた、とされています。

つまり、通訳とは話し手の「発言」を別の言語に訳し、聞いている人達に「伝える」ことだ、と考えます。同じ言語を話す人同士でも、発言が相手の耳に“音”として届いてもそれはただ「聞こえた」だけで終わってしまいます。きちんと相手の「心」に届いたかどうか重要で、聞き手の心に届くことこそが真に「伝わる」ということではないでしょうか。

そうした意味で、通訳にとって大事なものは、話し手側に次のような要素が必要だと思います。それは「伝えるべき内容を持っているか（中身）」、「上手に伝えられるか（ハウツー）」、「伝える熱意があるか（パッション）」です。



4. 2020年東京オリンピック招致活動

今回の東京オリンピック招致に成功したブエノスアイレスのプレゼンテーションを例に取ってみましょう。

ブエノスアイレスのIOC（オリンピック委員会）総会的时候は、今言った3つが見事に相俟った良いケースだったと思います。アスリートの人達は本番競技のときにピークを持って来ると言いますが、今回の日本チームは正にブエノスアイレスの最終プレゼンにピークを持って来ることが出来た例だったと思います。

(1) 伝えたいこと（中身）

この時の伝えたい“中身”は「東京にオリンピックを持って来たい」ということです。東京を一つの国として見たら、世界のトップ10に入る経済規模です。「開催準備基金が4,000億円あります」等々色々な好材料を挙げ、また皇室初のプレゼンターとして高円宮妃殿下にスピーチをして頂いたりもしました。こうして招致チーム全員で「オリンピックを日本に持って来たい」という気持ちを表すことが出来た、と思います。

(2) 上手な伝え方（ハウツー）

次に、“ハウツー”では招致チームで外国人のプレゼンテーションのコンサルタントを複数雇いました。招致委員会開催の数ヶ月前から折に触れ、練習をしてきました。猪瀬前都知事は石原元知事よりももっと「東京に持って来たい」という強い気持ちで努力なさったと思います。ただ、猪瀬さんはコンサルに「笑顔、笑顔。口角を上げて」と言われて、折角口角を上げて、笑った顔に見えないというようなことがあったりしました。IOCの会場は横長で演壇が端にあるため、反対側の端の人にはプレゼンターの顔は

見えず、大きな画面に話している人の顔が映し出されます。招致チームの練習にはプレゼン会場と同じような会場を借り、映像を振り返るためのカメラを入れて練習しました。「カメラ視線を意識しろ」としつこく言われましたが、中々出来ませんでした。でも、最後の頃には全員が段々出来る様になり、会場の人達はあたかも自分に向かって話されているような印象を持たれた、と思います。発音が苦手な人も多く、イギリス王室のスピーチコーチと言われるコーチがついて指導しました。もっとも、英語を母国語とする人が「こんな風に発音するように」と言っても無理なところがあります。こうした中で、フェンシングの太田選手はスピーチを全部暗記してプレゼンに臨んでいました。

ーメディアトレーニング

また、外国のコンサルによるメディアトレーニングも行いました。これは、メディアとの受け答えで問題発言をしないためにはどうしたら良いか、という訓練で、石原元都知事の頃には行わなかったものです。オリンピック招致は一つの産業（インダストリー）ですから、それを専門にする海外のコンサルが100人以上います。今回の東京チームのトップは、2016年のリオデジャネイロが招致合戦で勝った時のコンサルチームのトップでした。彼はその前のロンドンの招致も成功していて、「俺はハットトリックだ」と豪語していました。彼らはオリンピックの招致について、本当にプロの仕事をする人達だったと思います。



例えば、「メディアは必ずひっかけるような質問をしてくると思え」と言われました。プレゼンの時に通訳として大変だったのは、「今度の通訳の仕事は“正確に訳す”ことではない。五輪の招致という唯一最大の目標に向かって“編集する”ことも恐れずに訳せ」と指導されたことです。また、彼らからは「プレゼンターが言いたい“思い”を伝えれば良く、『悪い、弱い、まずい、暗い』などのネガティブな言葉は一切使ってはならない」とも言われました。例えば、「お台場の水質が悪いという報告が出ていますが、そんなところでトライアスロンが出来るのですか？」という質問に「確かに、水質は問題です」というのではなく、例えば「そこは、東京がこれから力を入れていく分野です」と答える訳です。通訳的には嘘ですが、「通訳が“編集”してポジティブに聞こえるように。嘘は言うてはならないが、ポジティブに言わなければいけない」というように再三言われました。それに対し、私は「それは通訳の任務ではない」と初めは反駁していましたが、「あなたは招致チームのメンバーであって、通訳ではない」と諭されました。このため、普通は「disaster area」（災害地域）と訳す「被災地」を、ネガティブな響きのある「disaster」を避けて「affected area」（影響を受けた地域）と訳したりしました。

プレゼン自体は原稿が決まっているので何の問題もなかったのですが、このように一番難しいのはプレゼン後のIOCメンバーとの質疑応答です。どの質問には総理が、どの質問には知事が答える、と決めていましたが、IOC委員の耳には私の英語が入りますので、非常に緊張しました。

(3) 伝える熱意（パッション）

特筆すべきこととして、今回の東京オリンピック開催を勝ち取った「日本人の言葉」を述べるならば、このIOC総会での安倍総理の「The situation is under control (<汚染水問題に関する>状況は、制御されています)」でしょう。正にブエノスアイレスで開催都市が決まろうとしていたその直前に、東京電力の福島第一原発からの放射能汚染水漏洩

が報じられました。事態の深刻さはもとより、東京の招致活動にとっても大きなデメリットでした。

安倍総理のこの発言は、英語でのプレゼンテーションスピーチで本人が話したことで、私が通訳者として関与したものではありません。しかし、この言葉には「何が何でも東京にオリンピックを招致したい」という伝えたい「中身」と強い「パッション」が込められている様に思われます。ブエノスアイレスでの総会の喧騒が終わり、夜中にインターネットを見たら、IOC委員が「難しい質問があったにも拘わらず、総理が **very clearly** に質問に答えていたので、感服した」というコメントが出ていたので、オーそれは私だぞっ、て思ったりしました。このように、招致成功までには随分と長い道のりがあった訳です。



5. まとめ

国際化の中で、言語の違いを乗り越えて伝えて行かなければならないこと、は避けられません。だから、面倒くさがらずに伝えるべき「中身」、「ハウツー」、「パッション」を持って自分の「意思」を伝えて頂きたいと思います。「伝える極意」からほど遠いものかも知れませんが、半世紀近い通訳としての私の考えを「お伝え」させて頂きました。

以 上



執筆者紹介

長井 鞠子(ながい まりこ) 1943年 宮城県生まれ
株式会社サイマル・インターナショナル 会議通訳者

<学歴・職歴>

1967年 国際基督教大学卒業
1967年 日本初の同時通訳エージェントとして創業間もないサイマル・インターナショナルの通訳者となる。

以降、日本における会議通訳者の草分け的存在として、先進国首脳会議をはじめとする数々の国際会議やシンポジウムの同時通訳を担当。